

## 五、収載史料と資料調査について

### 1. 収載史料の概要

はじめに ここでは、本資料編に収載した史料の概要を示すとともに、町域に関して行った資料調査についてもまとめておきたい。収載された史料の表記等については、冒頭の例言で示されているとおりである。また、収載した史料のうち町内文書の表題の頭には通し番号を付してあるが、通史編の一部本文において照合できるように配慮している。

なお、収載史料を含めて史料整理や読み本の作成については、以前から地道な活動が続けてきた地元の「ふるさと歴史研究会」古文書部会などの成果に負うところが多い。

本資料編では、①まとまった分量のある「組中人々手前品々覚書帳」・「諸事御触抜書」を最初に収載し、②町内文書、③町外文書、④近代刊行物などに分けて収載している。特に①は城端町に関する基本史料として、長文であるが省略せずに収載した。収載した町内史料は地区別に編年で整理しており、個人蔵の史料もそれぞれの地区に配列した。

表1 品々帳にみえる城端町来住者軒数

元禄六年(1693)より数えての来住年代	軒数
140 (天文22年 <1553>)	1
122	2
121	2
119-120 (天正元年 <1573>)	15
109-100	45
99- 90 (慶長8年 <1603>)	30
89- 80	29
79- 70 (元和9年 <1623>)	24
69- 60	34
59- 50 (寛永20年 <1643>)	21
49- 40	35
39- 30 (延宝元年 <1673>)	66
29- 20	46
19- 10 (天和3年 <1683>)	59
9-	79
-	188
	676

※本表は『富山県史』通史編Ⅲ949頁の表より作成した。来住者の出身地は砺波郡や五箇山、金沢などが比較的多いとする。本史料ではこうした統計処理がなされることで町の成長がわかるとされている。

収載史料は町内と町外の文書は合わせて一〇七点である。

組中人々手前品々覚書帳 元禄六年に書き上げられた「組中人々手前品々覚書帳」は、すでに『城端町史』や『富山県史』、『加賀藩改作法の研究』などで活用されている。しかしながら、その全体は今まで、一般の目に触れる形で活字化されていなかった。本帳は、目次に示したように出丸から新町・野下など全部で九冊に分けられており、当時それぞれの町に住む一軒ごとの住民情報ともいえるものである。特に、表1で示したように、天文・天正期から城端町に移住したと伝える家が見られ、いつ頃、どこから、何軒くらい町に来住したかが記録されており、江戸時代初期に町場を形成してゆく城端町の成り立ちがわかるものである。

諸事御触抜書 本史料は「ふるさと歴史研究会」により平成六年に活字化されているが、再度収録することとした。これは天正一三年（一五八五）より筆が起こされ享保一二年（一七二七）に至るまでの、城端町に出された触や申渡などを集めた留帳である。成立年次は未詳であるが、その内容は、近世前期の城端町の成立やしだいに整備されていく加賀藩との支配関係がうかがえるものである。

町内文書 後述するように各地区ごとに調査収集したもののうち、どちらかといえば村方にかかわる史料を最初に置き若干の選択を加え収載している。近世の藩政村（自然村）を中心に是安地区から初めて北野地区に至る一三の地域に分けて、それぞれの地区に関する史料を九五点収載している。一点一点の史料の詳細を省くが、近世の村方における新開願や基盤割、年貢皆済状、役人交代願、送状、山論関係の史料などを収載した。近代については、行政関係の史料を中心に収載している。



また、各個人で所蔵している史料は、関係する地区に配列している。是安地区周辺の様子がわかる近世の巡検上使に関する天保九年（一八三八）の記録を一点、寛政三年の中尾村に関する近世の戸口史料を一点、細木に関する享保から化政期にかけての基盤割願、切高証文などを残す細川家の肝煎文書二七点の計二九点を収載した。

次に町に関するものとして、医師で郷土史家である洲崎哲二が収集した文書群から、天保四年の藩政期の多様な記録である「袖鑑」と戦前に城端町長を務めたこともある荒木家に伝えられている日誌的な記録である「荒木旧記」の一部、三点を収載した。また、城端町が所蔵する天保九年の巡見使への返答書、前田利常（微妙院）が与えた御印書の留帳、善徳寺にかかわる記録としての「真調記」など三点を収載している。これらの一部は『富山県公文書館文書目録』四・七・八などでも扱われている。

**町外文書** ここでは、高樹文庫・杉野家文書・中辻文庫（それぞれ後述）などから六点の史料を収載している。

高樹文庫は新湊市博物館に保管されている、江戸時代後期の著名な測量家石黒家に伝わった資料群である。ここでは城端出身の天文学者西村太冲の書簡を収録した『高樹文庫資料目録』昭和五三年、『高樹文庫資料目録（古文書）』平成二年。このほか西明村に関する内検地関係の絵図・測量野帳などの記録史料が確認できた。杉野家文書は富山市郷土博物館『十村杉野家文書目録』平成七年と福岡町歴史民俗資料館『大滝村十村杉野家文書目録』平成二年に分かれて保管されている。これは幕末期に井口村裁許であった福岡町の十村杉野家に伝わったもので東西原村の記録を収載した。また、石川県立図書館蔵の文化三年「触下寺庵由来書」は善徳寺にかかわる記録として収載した。

近代に関する記録として刊本から三点収載した。中辻文庫は入善町にあった私立図書館「米沢図書館」の戦前の蔵書を中心とする氷見市立図書館の文庫である（『中辻文庫図書目録』平成六年）。明治四三年「蓑谷村農是調査」は、内容が詳細でかつ具体的である。これは、多くの地域の人々がかかわって実施された、地方改良運動と連動する地域分析と実践の報告書として貴重である。郡は大正期まで置かれていた行政組織で、ここに設置されていた郡会に関する議員の人名録である、昭和三年刊行の『郡会宝鑑』から町域関係を抄録して収載した。

以上、収載史料の概要を簡単に示したが、次に本巻の編纂に当たって行った資料調査、収集の経緯、資料群の全体的な傾向について触れておきたい。

## 2. 調査概要

**調査の経緯** ここでは、資（史）料調査の経緯とそのなかで中心を占める区有文書と自治体史記述の基本資料ともいえるべき町役場文書について触れておく。

城端地域はおおむね、町部のほか大鋸屋・南山田・蓑谷・北野の旧町村（行政村）にまとめられており、五〇あまりの地区（自然村）に分かれている。この自然村は近畿地方と同様に江戸時代の村（藩政村）と比較的一致していることが多い。

本巻の刊行に当たって、最初に文書資料を中心として、こうした各地区に対して教育委員会からのアンケート配布による所在調査と電話による聞き取り調査を行った。これは区長を中心に各地域の方々の多大な協力と理解に基づき実施できたものである。この調査は、各地区に伝存してきたと思われる古文書等に対しての、恐らく初めての全域的な基礎的な資料調査であったと思われる。この情報に基づき現地に



表2 地区別文書調査点数の概要

地区名	調査箇所	調査点数
城端	東下	44
	西上	118
	西下	127
	小計	289
	信末	259
南山田	是安	438
	野田	194
	塔尾	295
	上見	95
	上原	190
	大窪	148
	細木	350
	小計	1969
	中尾	109
大鋸屋	大鋸屋	306
	林道	310
	理休	66
	小計	791
養谷	養谷	326
	細野	148
	西明	421
	東西原	227
	小計	1122
計		4171
個人蔵	1	6
	2	36
	3	7
町蔵文書	町蔵洲崎文書	222
町外文書	加越能文庫	39
	福岡杉野文書	43
	富山杉野文書	17
	高樹会	32
小計		131

※調査点数は区有文書の場合、予備調査として現地での数量確認に基づくものである。この時は保管状況など現状確認を優先したためと、合冊・破損など諸般の事情により概数にとどまるものもある。このため今後本格的な調査整理が必要と考えられる。町外文書については原則的には通常のカラーネガによる写真撮影を実施した文書点数である。

における現状確認のための予備調査を実施した。その際、簡単ではあるが所蔵資料の主要なものについてはその表題や年代、冊数を中心に記録し、仮目録を作成することにした。また、保管現況や一部の資料については現地で、執筆に際しての内容確認や後の翻刻のため資料として写真撮影を実施している。

調査に際しては高橋とともに副委員長である斉藤耕三が調査に同行し、教育委員会では景山奈央子・宮崎順一郎が地区との連絡・調査・撮影整理（特に仮目録作成）などを精力的に行った。調査箇所や日程は本編の編集日誌に示されている。

**調査結果** この調査の過程で、表2に示したように、南山田地区では一九六九点・大鋸屋地区七九一点・養谷地区一一二点など各地区で保管する四〇〇点を超える区有文書を初め、いくつかの個人所蔵文書を確認することができた。これにより資料内容などの現状把握が可能になったことは大きな成果であろう。しかしながら、各地区を対象としたアンケートを基礎とした調査のため、おのずと調査対象や範囲

に限界があり、刊行までの日程といった時間的な制約もあって残した課題も多い。特に町内すべての地域に予備調査が及んだわけではなく、文書以外の文化財や信仰・民俗的な生活資料などを含めて、まだ未調査で眠っている多くの資料の存在も考えられる。このため本地域における今後の継続的な調査研究の成果に期待したい。

このほか、後述するように散逸を免れた、大鋸屋村の役場文書、城端町が保存してきた役場文書の存在を確認できたことはもう一つの大きな収穫でもあった。いずれの役場文書も区長をはじめ町関係各位の努力により、冊子表題と年代のみではあるが仮目録を作成し、その概要が把握できるようになっている。

**町外調査** 各地区への調査と並行して、十分とは言えないが町外に残る関係資料の調査も行った。先に述べたように、杉野家文書や高樹会への調査のほか、金沢市立玉川図書館近世史料室には加越能文庫をはじめ加賀藩の藩政に関する多くの資料が保管されており、関係資料が散見する（『加越能文庫解説目録』上・下）。こうした町外文書の内容に



表3 大鋸屋村役場文書時期別保存簿冊数

和暦	簿冊数	総冊数対比
明治8～21年	101	5.6
明治22～29年	73	4.1
明治30～45年	259	14.3
大正2～14年	337	18.7
昭和2年～昭和6年	176	9.7
昭和7～12年	179	9.9
昭和13～16年	142	7.9
昭和17～20年	134	7.4
昭和21～27年	327	18.1
昭和47年	2	0.1
年未詳	76	4.2
合計	1806	100

※大鋸屋村の村役場文書は、各時代をととして一定の整理・選別されていると考えられる。さらに町村合併の時に一部を除き町の書庫などに移管されず、現地保存されたために残ったと考えられる貴重な資料である。ここでは、町村制施行・日中戦争・太平洋戦争など幾つかの年代に分けてその保存率を出している。明治期後半から文書の数が増えてゆき、太平洋戦争後の変革期の貴重な資料を含む。その主要内容は表5を参照してほしい。

ついでには、『富山県史』や周辺自治体史に負うことも大であった。さらに、各所蔵所が作成した既刊の目録より町域関係と見られるものを選択して、一三〇点以上の文書などを各所蔵先にて調査した。この他、富山大学所蔵の十村文書である川合文書（越中国砺波郡戸出村川合文書目録「平成八年」）、国立資料館史料館が調査しており、現在も大量の資料が当主により管理されている十村折橋家文書調査報告書（昭和四九年）を確認している（『金子文書折橋家文書調査報告書』昭和四九年）。

### 3・区有文書と役場文書

**区有文書** 各地域で区長宅や公民館などに残る、引継文書を入れてある区長タンスのなかに伝存している区有文書が多く確認できる。このなかには、近世の村関係の資料として村役人が管理してきた記録文書が伝存していることが多い。今回、肝煎を務めた村役人の家に伝わっ

た文書については、調査を尽くすことができなかった。このため、各地区のこうした区有文書が近世の村の様子を知るための貴重な資料ともなった。さらにここには、明治以降から今日に至るまでの村の運営や管理に関する史料、地域行政にかかわる史料などが残っている。ただし平成に入っているものは現在も活用されている場合もあり、量的にも多く今回の調査対象からはずしたものが多し。

区有文書の内容は、近世では村御印や村の新聞文書、年貢皆済状、村役人の交代願、碁盤割（田地割）関係とそれに関する野帳（土地の調査記録）などがみられた。特に地域性を反映して山論関係の文書は天正期からの明治に至るまでの記録を残している。明治以降では、土地台帳や地引図、区画整理に関するものなど土地関係が多く、あと村の万難（会計記録）や共同作業などのための人足帳、村の内部での活動を示す記録類が残されている。こうした区有文書は地域の生活や自治会活動を伝える貴重な資料群である。

#### 役場文書

ここで注目しておきたいのは、大鋸屋地区に保管されていた一八〇〇点に余る旧大鋸屋村の役場文書である。その概数を年代順に整理し表3で示した。表4は、ラベルによる簿冊番号と簿冊年代を示した。これにより整理や選別する以前の簿冊の状況が推定できる。

表5は簿冊表題から内容を整理したものである。明治八年から昭和二七年の町村合併までを中心として、議会関係や収支決算など大鋸屋村の行政全般をうかがうことのできる資料群であると考えられる。特に戦前期に整理・分類されていたと思われる、赤庶〇号・赤会〇号・印第〇号・印庶第〇号の添付ラベルが確認できた。表5ではそのラベルによって大きく庶務関係と会計関係に分類できると考えて示してあるが、この二つで残存冊子の約半分を占める。こうした保存状況から国



表4 ラベル名による簿冊番号と簿冊年代

ラベル名	赤 庶		赤 会		印 第		印 庶 第	
	初	終	初	終	初	終	初	終
簿冊号数	48	1466	1	2495	1380	1526	1520	1538
簿冊年代	明治22年	昭和17年	明治8年	昭和17年	昭和13年	昭和21年	昭和21年	昭和21年

※簿冊番号は残存簿冊数とは一致しない。ここからは、昭和17年に何らかの整理がされたと思われ、分類・選別や町村合併により移管される以前の簿冊の状況がある程度推測される。

表5 大鋸屋村役場文書時期別保存簿冊数

内 容	簿冊概数	記録年代	保存総数対比(%)
村会議案・原案・議決録	78	明治22～昭和27年	(4.3)
議事録	22	明治22～昭和23年	
議事関係	14	昭和2～17年	
村会原案	42	明治35～昭和17年	
村会議員選挙	6	明治22～43年	
村会招集告知書	34	大正2～昭和17年	
小計	196		10.8
公示原簿	46	明治40～昭和24年	
土木請負契約関係	73	明治35～昭和15年	(4.3)
工事請負関係	8	昭和4～11年	
報告申請書	27	大正10～昭和27年	
印鑑	10	昭和2～12年	
衛生関係	15	昭和2～17年	
庶務関係	15	昭和11～17年	
社会教化	13	昭和2～17年	
時局匡救	4	昭和7～9年	
統計関係	15	昭和2～17年	
小計	226		12.5
a 以上 赤 庶	422		23.4
歳入歳出一覧表	75	明治34～昭和25年	(4.1)
支出一覧	19	明治43年	
予算書綴	34	明治29～昭和25年	
県税領収書	29	大正5～昭和15年	
国税領収書	28	明治43～昭和11年	
村税賦課台帳	14	大正4～8年	
納額通知書	12	明治44～昭和4年	
小計	211		11.7
収入計算書・命令簿	19	明治33～大正15年	
領収書綴	44	明治43～昭和16年	
各大字支出関係	46	明治34～大正11年	
寄付物件台帳	22	明治22～昭和12年	
地価取調帳	44	明治8年	
土地登記通知簿	29	大正4～昭和14年	
流用通知書	16	明治33～大正5年	
郵便切手受払簿	41	明治23～昭和22年	
出張命令簿	37	明治30～昭和16年	
小計	298		16.5
b 以上 赤 会	466		25.8
a + b	888		49.3
(保存総数)	1803		100

※上段は表紙に赤庶と貼紙、下段は赤会と貼紙があるものからそれぞれ分類し、その冊数を数えた。この分類の詳細は不明であるが、庶務と会計との区分と思われる。この貼紙は恐らく戦前になされたものと考えられる。表紙にこの記号がないものは昭和20年代が中心であり、これを上の表の分類に分けて加えた。本簿冊の数は目録より数えた概数である。参考にそのいくつかについて保存総数に占める割合を示した。これによるとやはり、村会関係・土木関係・税務関係などが保存の中心を占めていることがわかる。

の委任事務を中心とした、明治以降今日まで続く役場や行政のあり方を彷彿とさせる。

また、城端町が保管する合併以前の二二・四点あまりの旧町村役場文書を確認した。その概要は年代で整理して表6に示した。このうち昭和期の合併に伴い、大鋸屋村に関するもの三一点・養谷村は二九点・南山田村八八点・北野村八三点などが旧村から引き継がれ、城端町の役場文書の一部として残ったと考えられる。一方で合併以前の旧城端町に關しての冊子が数多く残る。また、旧町に關する保管冊子の総数

九八三点のうち約八〇パーセントが合併以前のものである。このうち明治後期から大正期にかけてと戦後から合併に至るまでの時期にかけ

ての文書の量的な伝存が注意される。こうした役場文書は一見偶然に残ったようにみえるが、恐らく役場職員が何らかの必要性から、意識的に選別し保存した結果が反映されているともみられる。その意味で選別・破棄されて残った後の文書ではあるが、城端町域の今後の行政においても、また歴史的資料としても活用されるべき貴重なものである。



表 6 城端町保存役場文書

	和暦	簿冊数	城端町文書保存対比 (%)	文書総数地区別対比 (%)
城端町	明治 8 ～21年	10	1	
	明治22～29年	21	2.1	
	明治30～45年	141	14.3	
	明治45～大正15年	207	21	
	昭和 2 年～昭和 6 年	64	6.5	
	昭和 7 ～12年	64	6.5	
	昭和13～16年	69	7	
	昭和17～20年	63	6.4	
	昭和21～26年	117	11.9	
	昭和27年～48	190	19.3	
	年未詳	36	3.6	
	小計	982	100	80.9
大鋸屋		31		2.5
養谷		29		2.3
南山田		88		7.2
北野		83		6.8
能美		1		0.1
	小計	232		
総計		1214		100

※本表の城端町については、時期区分による保存状況の比率（保存総点数に対してそれぞれの項目の比率を示している）を参考に示している。ここでは明治末年から大正期と戦後から町村合併までに文書が集中している。昭和48年を下限とすることからこのころに一度選別が行われた可能性が考えられる。そのほか、合併時に移管された旧村役場文書については、町村合併直前の議決録や支出関係、小学校、統計、戸籍関係、履歴などがみられる。ただし、これらの史料は本巻の編集に限定して特別に歴史的史料として予備調査を実施したものである。このため、整理・保存の継続中の行政史料であることを鑑みてその概要を示すにとどめた。

資料保存 本巻編集に当たって確認され、利用されたこうした、区有文書をはじめ役場文書などこれらの文書群は、今日に至るまでの地域社会の成り立ちや地方自治の展開などを考えるうえで、貴重な資料に成り得るであろう。さらに、歴史研究は言うにおよばず、今後のより豊かな地域像を考えるための基礎的な資料として、活用できると思わ

れる。

今日言うところの平成の大合併による地域社会の拡大化は、急速に地域の結節点を失わせ、地域に暮らす人々のアイデンティティーの希薄化をもたらすのではないかと危惧されている。戦後、高度成長期を境に地域社会にも大きな都市化の波が押し寄せてきた。そうした社会の変化のなかで、自治行政のあり方を示す役場文書など行政資料、地域社会とともに歩んできた区有文書や個人所蔵の各種資料などの散逸の進行が心配される。

事実、過去の町村合併や市町村における自治体史の刊行によって、また地域の世代交代などのいろいろな事情により、多くの貴重な記録資料が失われた経緯が知られている。まさに今この瞬間にも全国で貴重な記録資料が失われつつある。こうした点を踏まえて、今日では富山県公文書館などを含めて全国的な歴史的諸資料の保存に対する活動の高まりが見られる。

本町域でも住民の手で今日まで守られてきた、文化財的な各種の資料とともに、古文書など各種の記録資料を、地域住民の共有財産として未来へと適切に保存しながら、継続的な整理・研究がなされることが重要であろう。さらにこうした自治体史の編さんが地域諸資料に対する一層の理解と保存への契機になることをあわせて願うものである（平成一四年全国歴史資料保存利用連絡協会 富山全国大会高橋報告および同会『会報』64号）。

（高橋延定）







城端町の歴史と文化（資料編）

平成一六年一〇月二日 発行

編集 城端町史編集委員会

発行 城端町教育委員会

富山県東砺波郡城端町一〇四六

千九三九一八九二

電話（〇七六三）六二一・二二二

印刷 富山スガキ株式会社



